

「伊藤先生を偲んで」

藤井正明

伊藤光男先生には東北大学理学部化学科学部 4 年生の時から博士課程の指導教官の 4 年間、東北大学の助手 8 年間、分子科学研究所・教授時代の 4 年間、合わせて 16 年間、直接ご指導頂く機会に恵まれました。これ以外の期間も折に触れてご激励頂きました。ご冥福をお祈りすると共に心から感謝申し上げます。正直に書きますと、私にとってあまりに大きな存在で自分自身としては伊藤先生のご逝去をいまだに完全には整理できておらず、思い出すことを書き出せば止めどなくなってしまう。「分子研レターズ」にある程度まとまった追悼文を書かせて頂きましたので、以下はその内容を元にして書かせていただきます。「分子研レターズ」を読まれた方、似通っている部分はいかがぞ寛恕ください

では、東北大時代の事から書かせて頂きます。私の世代は 2 年生の後半から「繰上げ授業」なる制度で学部先生の講義を取るようになっておりました。伊藤先生は量子化学のご担当でこれから 3 年生まで 1 年半に渡って量子化学を、加えて半期の分子振動をしっかりと教えていただきました。先生の講義ノートはノートではなく大量の黄色のリーガルパッド（レターサイズで切り離せるメモ用紙）に書かれており、それを大型のクリップのようなもので留めてあったと思います。海外に行くとき普通に売られていますが、当時白いものしか見たことがなかった学生には妙に物珍しく、多分どなたも覚えているのではないのでしょうか。さて、講義ですが、学部生にとって伊藤先生は怖い先生でした。講義内容は端正に組み立てられて内容に引きこまれ、とても魅力的でした。板書の旧漢字も妙に新鮮で、旧漢字のままノートをとっていたら同級生に笑われた記憶があります。当時の先生方はみな威厳があり、すごく厳しい扱いをするわけではないのですが、入ってこられるだけでこちらの背筋が伸びる感じがしたのを覚えています。研究室に入ってみると直ぐに厳しさと暖かさを合わせ持つ方である事が分かりました。四年生は岩波現代化学「光と分子」の先生の書かれた章をゼミ形式で勉強するのですが、やれ「新しい解釈を見つけた！」だの、「この導出は間違っている」、とか、暴走しまくる四年生の勉強会に毎回付き合っていました。研究報告の際はもっと直接的に議論して下さい、解釈が対立したときには本気で感情を込めて議論して下さいました。私が四年生になった時は丁度研究室のテーマを三上直彦先生がシカゴ大で開発された超音速ジェット分光に 100% 転換したときで、測定結果は全てが新しく、初の水素結合錯体の電子スペクトル（阿部晴雄先生）、vdW 錯体（五戸成史さん）、多光子イオン化分光（村上純一さん）、無衝突での高速緩和（平谷篤也さん）そして二重共鳴分光（江幡孝之先生）などなど測定対象も方法論も百花繚乱で出た時で、議論につぐ議論という中、本気の先生によって鍛えられました。この時代、スペクトルはチャートという長い巻紙で記録されていたのですが、測定するとすぐにセミナー室で巻紙を広げ、学生やスタッフだけではなく伊藤先生も隣の教授室からお出ましになって議論が始まっていました。解釈がつか

ないと関係者皆で集まって翌日再度の議論になるのですが、伊藤先生が先に解決の糸口を見つけることがしばしばありました。例えばポリエンの禁制電子状態を測定するつもりで二波長イオン化 **threshold** スペクトルを測定していたら **threshold** の階段構造の中にたくさんの **dip** が出現し、我々はやれ超励起状態だとか言っていたら、翌朝開口一番、中間状態 S_1 から S_0 への誘導放出だ、と伊藤先生に解釈され、測定した本人はもちろん皆で大変悔しかったです。唯一明確に伊藤先生に「勝った」のは同期の奥山克彦君（日大）だけで、テトラフルオロベンゼンの電子スペクトルを伊藤先生が異性体2種で解釈していたらこれを非調和なプログレーションと解釈して2光子吸収スペクトルで実証することに成功しました。この時、先生は「負け」を認められたのですが「俺の解釈でも論文は書けたぞ！」と負け惜しみとも取れるお言葉を言われ、ご自身の解析力に絶大な自信があることがよく分かりました。解釈は学生・スタッフ対伊藤先生の競争で研究はいよいよ盛り上がっていましたが、どうやっても敵わなかったのは論文執筆の速度です。先生は一晩で第一原稿を手書きで書き上げることが多く、「また先に書かれてしまった！」というメンバーが多かったです。教育的配慮で学生には一応書かせてくださることが多かったのですが、お渡しすると学生の内容ではまとまりにかけており、2、3ページは赤ペンが入るものの段々筆圧が強くなり、4ページ以降は大きな斜線が書かれて別紙にゼロから書かれることが非常に多かったです。あの執筆力にはいまだに自分では追い付けず、心底尊敬しております。

研究室の行事は先生の存在で大変楽しく一体感のあるものでした。特にセミナー室での料理と宴会は楽しく三上先生が捌く初鰹とホヤとか、平谷さんの叩きや天ぷらなどお料理上手が作る中、先生は長机の中心におられて大変楽しいお話を聞かせていただきました。スケッチの思い出はもちろん、ナンシー大の謎の **N-ray**、パリの夜の繁華街、明太子は先生の実家が発祥だと確信しているとか、とにかく面白く、いまだに思い出してはニヤッとするものがあります。もちろん、先生ご自身の「一銭洋食」も振る舞って頂きました。そんな先生ですの、分子研の所長を勤められているときには当時の若手助教授らには絶大な人気があり、御退官時にはなんと「名誉助教授」をいうかつてない称号を受けられました。まさしく先生のお人柄と思います。国内外で有名な伊藤先生のスケッチ（水彩画）は名大教授の岡本祐幸さんのお世話で分子研の丘の麓にある葵丘会館に常設展示されているそうで、分子研に出張する際にはぜひ寄りたいと思っています。岡本祐幸さんのホームページには伊藤先生の絵や文章の膨大なコレクションが掲載されておりますので、ぜひご覧ください。

<https://www.tb.phys.nagoya-u.ac.jp/~okamoto/Ito/index.html>



絶筆となった富士山の水彩画



2019 年 7 月 20 日、日比谷松本楼にて

岡崎国立共同研究機構の機構長をご引退後は茗荷谷のご自宅で奥様とお暮らしになって
おりました。普段は朝の散歩とラジオ体操、スケッチと充実したご生活であったと存じます

が、先生のご自宅を訪れる関係者や同窓生も大変多く、これまたお人柄と存じます。奥様が体調を崩されてからは家事一切を先生がおやりになって奥様の介護に尽くされており、なかなかできることではないと深く感じ入りました。最愛の奥様ご逝去後は毎朝小石川公園脇に眠られている奥様のお墓に出向かれており、奥様への愛情の深さを感じた次第です。その後も訪問者は途絶えることもなく、また、折に触れて同窓生はご招待頂き、先生のご自宅で宴会を楽しませていただきました。さらに門下生や関係者の大きなお祝い事があると、新大塚にある先生行きつけの日本料理屋や浅草・神谷バーに連れて行って頂き、さまざまなお話しをしていただいたのも忘れ難い思い出です。2019年7月に行われた研究室の後期世代の同窓会でご挨拶頂いたのが大きな集まりにご出席された最後かと思います。

7月の同窓会には普段と全く変わらぬお姿でありましたが、それから程なくして胃がんを患われていることを伺い、驚愕いたしました。毎年健康診断を受けられていることを存じ上げておりましたので、すでに転移するまで見つけれないとは医者の大ミスではないか、と怒りを感じました。8月末に名大岡本さん、理研杉田さん、元東大物性研所長・東京理科大副学長の福山先生らのお誘いでお見舞いに伺い、状態を気にしつつ参りましたが、伊藤先生は見事なまでの平常心で、「むしろすっきりしたよ」とおっしゃられたのを忘れられません。終末期治療をされる病院をその時には決められており、せめてもの恩返しにご入居される際車でお送りさせて頂きました。2時間弱のドライブでしたがいろいろなことを思い出しつつお話ししながらお送りできたのも忘れ難いことでした。ご入院の前後より甥御様ご夫妻をはじめとするご親族の皆様がさまざまなお世話をされており、入院生活も寛いものでした。私は理研・田原さん、高エネ機構物構研所長・小杉さん、東大・藤田さん、東大・塩谷さんらとお見舞いに参りましたが、なんと先生の病室にはビールが備えてあって昼食をご一緒に頂きながらビールを頂戴し、病院にもかかわらずちょっとした宴会になりました。話はいよいよ盛り上がっていき、田原さんがご持参された神谷バーの電気ブランの封が切られるに至り入院とはとても思えない楽しいひとときとなりました（流石に看護師さんには注意されましたが）。病院からの雄大な富士山の眺めは先生のお気に入り、掲載させていただいた富士山の絵は入院生活の中の最後のご作品です。この絵をお描きになった頃はベッドに寝たままの時が続いたそうですが、ある時に起き上がられて一気に仕上げられたとのことです。この絵をお描きになってから9日後、伊藤先生は穏やかに旅立たれました。

こうやって伊藤先生の思い出を書くにつれて先生の存在の大きさを改めて感じる次第です。私の手元には頂戴したパリのセーヌ河岸や浅草などの絵があり、絶筆となった富士山の水彩の複製と共に眺めては先生に思いを馳せております。伊藤先生の薫陶を受けた者は門下生に止まらず日本から世界に広がって活躍しており、いかに偉大な方であったか、月日が経つにつれてますます実感しております。

先生、本当にありがとうございました。合掌